

北海道留辺蘂高等学校

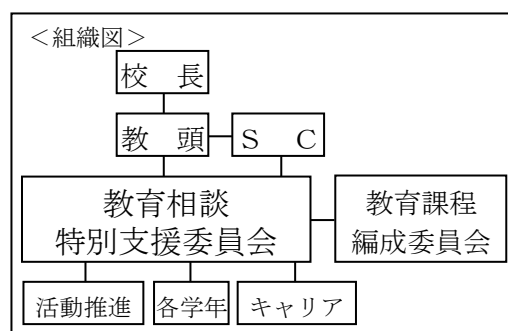
課程： 全日制
 学科： 総合学科
 生徒数： 75名

1 取組の特徴

一連の事業7年目の本校は、これまでの実践で身に付けた集団カウンセリングのスキルを活用したコミュニケーショントレーニングに積極的に取り組んでいる。「自己表現」「人間関係形成」「問題解決」「自己理解」などをねらいとしたSGEを1年次では「LHR」や「産業社会と人間」、2年次では「総合的な学習の時間」において計画的に実施している。

2 取組のねらい

- 1 コミュニケーションスキル育成トレーニングツールの蓄積促進及び校内外の研修を通して、全教員がSGE等を実践できる体制づくり及びそのスキルを活用した教科指導を促進する。
- 2 「ほっと」、「アセス」の分析及び効果的な活用について研修を進め、教員のスキルアップを図る。



3 取組の経過

- | | |
|--|--|
| <p>4月・担任による入学式後及びHR開きでの集団カウンセリングの実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宿泊研修におけるグループエンカウンターの実施 ・1年生「ほっと」1回目の実施と分析 <p>5月・1年生「アセス」1回目の実施と分析</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SCによる個別カウンセリングの開始 ・1年生外部講師による集団カウンセリング <p>6月・1年生「地元で働く人へのインタビュー」実施</p> <p>9月・1年生「アセス」2回目の実施と分析</p> | <p>9月・教員研修会（特別支援教育とリフレーミング技法）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生担任による集団カウンセリング ・2、3年生「アセス」1回目の実施と分析 <p>10月・1年生担任による集団カウンセリング</p> <p>12月・1年生「地元で働く人へのインタビュー」まとめ発表会</p> <p>1月・1年生「ほっと」2回目の実施と分析</p> <p>2月・1年生「ライフプラン」発表会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生「アセス」3回目の実施と分析 ・1年生外部講師による集団カウンセリング |
|--|--|

4 取組の内容

1 外部講師による集団カウンセリング（1年生：5/25、2/8）

- (1) ねらい コミュニケーション能力を高め、仲間との会話をより楽しくできるようにする。
- (2) 内容 ロールプレイを通して「気が乗らない聞き方」や「相手を押さえ込むような話し方」では会話が楽しくないことを理解し合い、より良い受け答えのトレーニングを実施した。
- (3) 成果 生徒からは「普段話さない人とも楽しく話せて良かった」「今回の演習で相手の顔を見て話すことが大事だと改めて思った」「グループで話すとても楽しい。またやりたいと思った」などの感想があり、今後も継続的に実施することで自己変容が大いに期待できそうである。



言葉なしで並ぶ「バースデーライン」に挑戦

2 HR担任による集団カウンセリング（1年生：9/28）

- (1) **ねらい** 前学期の生活を振り返り、半年間の個々の努力を学級全体で認め合い、自己有用感を高める。
- (2) **内容** 小グループになって半年間を振り返り、4月に立てた目標をもとに、目標達成できたかどうかを語り合った。
- (3) **成果** 輪になって座り、隣の生徒の頑張りを自分の気持ちを入れて紹介することで、自己理解や他者理解が深まった。



輪になって紹介し合う1年生

3 教員研修会（9/2）

- (1) **ねらい** 通常の学級における発達障がいのある子どもへの指導や支援に関する基礎的な知識や技能を習得する。
- (2) **内容** 本校教諭（特別支援教育コーディネーター）を講師に、発達障がいのある子どもへの指導や支援に関する「校内研修プログラム」の活用事例と本校における実践について検討した。
- (3) **成果** 特別支援教育に対する知識を深めることができた。また、リフレーミング技法などの、本校でも活用できる技能を習得することができた。



教員研修会の様子

4 各教科での取組

少人数で授業ができる総合学科の特色を生かし、各教科でも積極的にSGEを導入し人間関係づくりを意識した授業を展開している。グループ活動やプレゼンテーション、ディスカッションなど言語活動を行い、意図的に生徒がコミュニケーションを取ったり、助け合ったりしながら授業が進められるよう工夫している。

5 次年度に向けて

1 成果

- ア 1回目の「ほっと」の結果より、意見を言ったり集団をまとめたりする力は弱い、高校生活のルールを守りながら自分らしく新しい環境に適応していこうとする生徒集団であることが分かった。2回目の「ほっと」では「自律」以外の項目で低下が見られ、後学期目立つようになってきた自分本位の言動の増加につながっていることが分かった。
- イ 生徒はコミュニケーションの重要性を感じている。生徒会が運営して行う「Noケータイday」の取組や、縦割りのチーム編成でスポーツを楽しむ「生徒会企画」などによって、学年の枠を超えた交流が盛んになっている。

2 課題

- ア 中途退学者や保健室相談者は特に1年生で多く見られていることから、入学後早期のコミュニケーションスキル育成に今後も力を入れて行くことが必要である。
- イ コミュニケーションスキルを養うためにも、ボランティア活動と部活動の活性化を図ることが必要である。

3 次年度に向けて

- ア 生徒の抱える問題の早期発見・早期対応をし、中途退学者や保健室相談者数等を減少させていく。
- イ 人間づくりを意識した学級経営や教科指導に引き続き取り組んでいく。
- ウ 「ほっと」の調査結果をもとに次年度の学年経営計画を作成し、低下した項目の向上を目指す。

北海道北見工業高等学校

課程： 全日制
 学科： 工業科
 生徒数： 382名

1 取組の特徴

本校では、学校行事や工業科科目授業等をとおして、実践的なコミュニケーション能力の育成に取り組んでいる。なかでも、「北高フェスティバル」では学校の紹介をしたり、ものづくりについて説明したりする機会をとおして、生徒の自己肯定感が高まり、その後の学習に対する取組も良好になることから、継続した取組が期待されている。

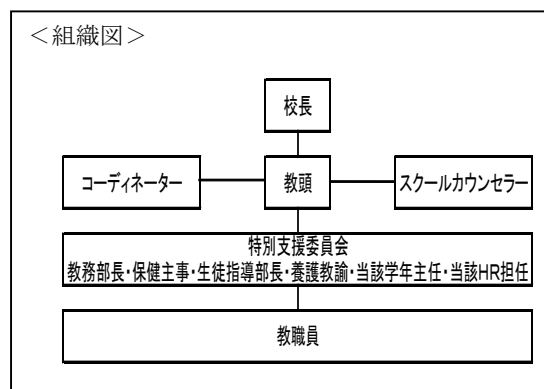
また、スクールカウンセラーと連携し、「サポート委員会」で可能な限り情報を共有し、個別の支援計画の作成に取り組んでいる。

2 取組のねらい

本校の卒業生のうち、約75%が就職しており、企業からも、専門性を持った即戦力として期待されている。そのため、実際の社会生活に生きるコミュニケーション能力を高めることが重要になってきている。

また、本校は例年中途退学者が多く、適切な人間関係の構築によって、中途退学者数を減らすこともねらいとしている。

<組織図>



3 取組の経過

4月・携帯電話安全教室（全校生徒）

5月・教科担任懇談会（1学年学級）

6月・宿泊研修 コミュニケーション講座
（1学年）

9月・北工フェスティバル（対象者）
・中学生対象体験見学会（対象者）

10月・薬物乱用防止教室（全校生徒）

11月・教科担任懇談会（希望学級）

12月・健康講話（1学年）
・北工競技大会（全校生徒）

2月・子ども理解支援ツール「ほっと」の実施及び分析をふまえた校内研修会

4 取組の内容

1 「コミュニケーション講座」等

宿泊研修のプログラムの中で、コミュニケーション講座を実施した。バースデーチェーンを始め、生徒が積極的に参加する様子が見られた。

携帯電話安全教室後のクラス内での話し合いでは、「携帯電話を利用する上での心構え」についてKJ法を活用し、グループ討議を行った。

生徒の相互理解を深め、ホームルームや学年における良好な人間関係が図られた。



4 取組の内容

2 学校行事、授業等

本校の学校行事、授業等の工夫により、教職員全員が生徒に積極的にかかわることができ、実践的なコミュニケーション能力の育成を行っている。

「体験見学会」

中学3年生を対象に、本校への理解と中学校との連携を強化するために本校で体験学習を行った。中学生との作業をとおして、自己表現の仕方や人を思いやる気持ちを学ぶことができた。

「北工フェスティバル」

毎年、本校の取組を地域に紹介するとともに、生徒の活躍の場をつくる目的から、市内商業施設にて地域住民へのものづくり体験イベントを実施している。各専門学科の代表生徒が日頃の学習活動の成果を発表し地域住民と交流している。地域の様々な人への対応やイベントの準備や運営を通して、コミュニケーションスキルの向上が図られた。



「北工競技大会」

毎年、生徒全体の交流を深めるため、北工競技大会を行っている。全ての生徒が参加し活躍できる場をつくることを第一とし、運動系と文化系の競技を実施して、全クラス対抗による競技大会を行った。各競技の応援もクラスで工夫して行い、生徒同士がお互いを励まし合う雰囲気をつくられた。



その他

工業科目関係：現場見学、体験、課題研究発表会

進路関係：就業体験、なるには説明会、進路ミュージカル、進路体験報告会

3 スクールカウンセラーの活用

生徒、教職員への面談のほか、保護者への面談や授業見学等を行った。生徒が悩みを打ち明けることにより、自己理解が深まっている様子や、問題解決方法の選択肢が広がっている様子が伺えた。また、SCと連携し「相談だより」を発行。LHR等を使い、担任から生徒への指導に活用している様子が伺えた。

1月までの利用状況 生徒:11件(5名)、教員:17件(6名)、保護者:3件(2名)

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者数は昨年度、一昨年度よりも若干少なくなった。

イ その他の指標による評価

保健室の利用者は、担任や学年・学科の協力により減少している。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

「ほっと」の活用により、各クラスの傾向と変容の把握が進んだ。

エ 生徒の変容した姿

1学年は、宿泊研修をきっかけに生徒同士の理解が深まった。

2学年は、就業体験で職場に必要なコミュニケーション能力について学習した。

3学年は、課題研究発表等で、大勢の前で課題研究の成果を発表するとともに、コミュニケーションスキル向上の成果について発表した。

2 課題

ア 本事業の取組内容及び成果をより効果的に発信していく必要がある。

イ スクールカウンセラーによるクラス別集団カウンセリングの充実や、より多くの生徒が効果的にスクールカウンセラーを活用できるよう方策を検討する。

3 次年度に向けて

・「ほっと」を活用した実態把握から、活用方法の研修を計画する。

・コミュニケーションスキル向上を図る取組の充実と、効果的な方策について検討する。

北海道雄武高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 63名

1 取組の特徴

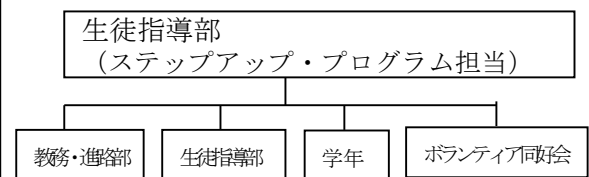
ピア・サポートトレーニングをHRや全校生徒、ボランティア同好会の活動などに取り入れ、校内外におけるサポート活動や小・中学生との交流を通して、より良い環境づくりに取り組んでいる。

また、3年生が1年生へトレーニングを行うことによって、3年生のセルフエスティームの向上とトレーニングスキルの定着を図っている。

2 取組のねらい

ソーシャルスキルトレーニングを通して、自尊感情を高め、生徒同士の理解の深化や良好な人間関係づくりを目指すとともに、いじめ、不登校や中途退学の未然防止と自殺予防に努める。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|--|---|
| <p>4月 ピア・サポート研修会 (年間11回実施)
 仲間理解とコミュニケーション (2学年)
 仲間理解とピア・サポート (1学年)
 自己理解と自己分析 (3学年)</p> <p>5月 話の聴き方トレーニング (1学年)
 インターンシップに向けた問題解決 (2・3学年合同)
 「ほっと」・「アセス」の実施 (全学年)</p> <p>6月 集団生活と人間関係づくり (宿泊研修)
 自己理解 (1学年)
 問題解決方法を知る (1学年)
 カウンセラーとの個別面談 (2学年)
 全校生徒で魅力ある学校を考える (全学年)</p> <p>7月 カウンセラーとの個別面談 (1学年)
 講師によるアサーショントレーニング (全学年合同)
 対立の解消方法を知る (1学年)</p> <p>8月 効果的なストロークを知る (1学年)
 ライフプログラミング (3学年)</p> | <p>9月 カウンセラーとの面談 (1学年)
 講師による人間関係づくりトレーニング (1・2学年合同)
 講師によるコミュニケーションスキルアップ (3学年)
 「ほっと」・「アセス」の実施 (全学年)</p> <p>10月 面接場面と傾聴理解 (3学年)
 価値観と他者理解 (3学年)
 カウンセラーとの面談 (3学年)
 講師によるコミュニケーションスキルアップ (2学年)
 講師による自己理解 (3学年)
 アンガーマネジメント (3学年)</p> <p>11月 カウンセラーとの面談 (3学年)
 講師による対話とリフレーミング (各1・2学年)
 講師による交流分析 (3学年)</p> <p>12月 諸検査の理解と活用研修 (教員)</p> <p>1月 非言語コミュニケーション (1学年)</p> <p>2月 「ほっと」・「アセス」の実施 (1・2学年)</p> |
|--|---|

4 取組の内容

1 生徒理解に向けた取組 (「ほっと」・「アセス」等の実施と活用)

昨年度同様に5月、9月、2月に「ほっと」と「アセス」を実施した。1学年の「ほっと」を分析すると、男子は9月に自己統制因子得点が低い傾向にあり、入学後の緊張感がとけ、気持ちに緩みが出てくるのが分かった。女子は9月に援助要請因子得点、2月に関係維持因子得点が高い傾向にあり、クラスの中で良好な関係づくりが進んでいることが分かった。「アセス」では男女ともに、調査毎に「非侵害的關係」が高くなるのが分かった。

このように、個々の生徒や学級集団の調査結果から経年変化をとらえ、成長の度合いや「要サポート」者の変化や分析をし、生徒個人及びHRの状況などの理解に努め、個別面接に活用した。

2 学年によるピア・サポートトレーニング（総合的な学習の時間）

自己理解と他者理解を通して、コミュニケーションにおける大切なスキルを身に付け、ピア・サポートへの理解を深めて人間関係の再構築を図るために、1学年の6時間は3年生代表による「仲間理解」「話の聴き方」「自己理解」「問題解決」「対立の解消」「効果的なストローク」のトレーニングを行った。2学年は「仲間理解とコミュニケーション」を行い、3学年は担任による「エゴグラムとアサーティブ」「ライフプログラミング」「傾聴と表現」「価値観と他者理解」「ストレスマネジメント」のトレーニングを行った。

トレーニングを通して、自己理解及び仲間理解が深まり、良好な人間関係の在り方や築くスキルを学習することができた。また、3年生が1年生のトレーニングを行うことによって、復習や自尊感情の高まりと下級生へのサポート意識が高まった。

3 ピア・サポーター養成トレーニング

ピア・サポーター養成トレーニングを月1回放課後に行い、校内での声かけや地域との関わりに生かしている。最終的に校長室で校内ピア・サポーターとして認定している。

4 講師による人間関係トレーニング

校外では宿泊研修において1学年が受け、校内では、函館大谷短期大学客員教授の中野氏によるアサーショントレーニングを全年次合同で行い、人間関係トレーニングを1・2学年合同、コミュニケーションのスキルアップを3学年、対話とリフレーミングを1・2学年、交流分析を3学年、1・3学年の個別カウンセリングを行うことによって、自己開示と人間関係の在り方などを考えられた。

5 インターンシップに向けてのピア・サポート（2・3学年合同）

2学年のインターンシップに向けて、名刺交換の仕方や各企業での心得、インターンシップへの疑問などについてグループ討議を行うことによって、インターンシップに向けての心構えができた。また、3学年はインターンシップの振り返りとして進路実現の心構えに生かすことができた。

6 異年齢交流（小・高交流、中・高交流、地域との連携）

1学年と小学3・4年生との交流、中学生とのサポーター交流、きらめき我が町事業（地域人との花壇造成）など、ピア・サポート活動を通してコミュニケーション能力を高め、協働で作業することの大切さを学ぶとともに自尊感情を高めることができた。

7 生徒会主催による他学年とのコミュニケーション

生徒会主導により雄高祭に向けて、他学年との交流を図り、「魅力ある高校」について考えや思いを伝え、「先輩、後輩関係なくアイデアを出し、質問に対して深く考えて答えることができたので楽しかった」など傾聴や質問をすることができた。

8 生徒理解と教育相談（教員研修）

12月に「ほっと」「アセス」「エゴグラム」「交流分析」などの研修を通して、生徒理解と教育相談の在り方を考えた。

5 次年度に向けて

1 成果

今年度不登校生徒は出現せず、昨年は1人当たりの欠席が3.9日、今年度は2.5日と減少した。1・2学年3回、3学年2回の「ほっと」「アセス」の調査から、9月の偏差値及び得点が高くなることが分かった。また、3学年は3年間で最も高い結果となった。

トレーニングにより、日頃意識していないコミュニケーションのあり方や自他理解を深め、生徒会や部活動、教科でのアクティブラーニングにも生かすことができるようになってきた。

2 課題

トレーニングの成果を活用する教育活動の実施とアンケートによる「困り感」の早期発見、個別対応によるコミュニケーションスキルのアップと支援の充実を図る。

3 次年度に向けて

教科や部活動などでコミュニケーションを意識した教育と、特別支援や教育相談委員会との連携による個別対応を行う。

北海道足寄高等学校

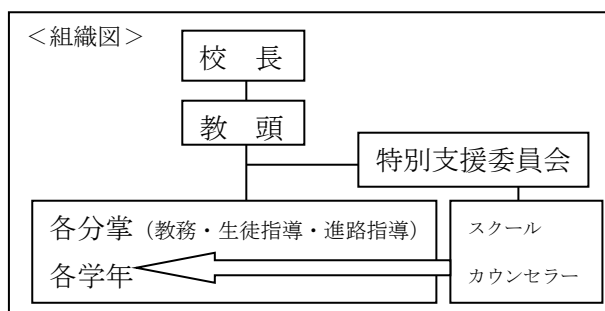
課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 123名

1 取組の特徴

カナダや沖縄などでの「異文化交流」、高齢者との「異世代交流」、地域の小中学校との連携事業等での「異校種交流」など、コミュニケーションに必要なスキルを磨くための様々な取組を実施している。また、小規模校の特性を生かし、「全校教育相談」等を通して生徒の状況をきめ細かく把握し、援助希求しやすい雰囲気づくりを行っている。

2 取組のねらい

様々な交流経験を通して、「自分とは違う他者への寛容さ」、「人と人とのつながりの大切さ」、「他者への思いやりや配慮」等の望ましい人間関係形成能力を育成する。また、きめ細かく生徒の状況を把握し、いじめの未然防止や早期発見、援助希求の重要性に関する認識を高める。



3 取組の経過

4月

- ・ネイパル足寄職員による人間関係スキルアップトレーニングの実施 [1学年]

5月

- ・足寄町職員等による英語によるコミュニケーショントレーニング①の実施 [1学年]

6月

- ・本別警察署員による SNS 等ネットトラブル防止講話の実施 [全学年]
- ・足寄町職員等による英語によるコミュニケーショントレーニング②の実施 [1学年]

7月

- ・交通安全啓発運動でのドライバーへの街頭での呼びかけの実施 [3学年]
- ・足寄町職員等による英語によるコミュニケーショントレーニング③の実施 [1学年]

8月

- ・「Hyper-QU」の実施 [1学年]
- ・足寄町職員等による英語によるコミュニケーショントレーニング④の実施 [1学年]

9月

- ・「全校教育相談①」の実施 [全学年]
- ・足寄町職員等による英語によるコミュニケーショントレーニング⑤の実施 [1学年]
- ・足寄小学校2年生との交流 [3学年]
- ・カナダ研修 (ホームステイ体験・文化交流)の実施 [1学年]

10月

- ・全校教育相談に関わる校内研修① (事例研究・情報交換)の実施 [教職員]
- ・「高齢者や障がいを持つ方々との共生」に関する講演・学習の実施 [2学年]

11月

- ・高齢者等複合施設訪問の実施 [2学年]
- ・足寄中学校との連携による「カナダ研修報告会」の実施 [1学年]
- ・釧路高等技術専門学校教授 三島 利紀氏による「Hyper-QU」に関わる校内研修の実施 [教職員]

12月

- ・見学旅行 (沖縄) での平和学習を通じた沖縄国際大学の学生との交流及び民泊・琉球文化体験の実施 [2学年]

1月

- ・「Hyper-QU」の実施 [全学年]
- ・ネイパル足寄職員による宿泊研修でコミュニケーション講座の実施 [1学年]
- ・「全校教育相談②」の実施 [全学年]
- ・全校教育相談に関わる校内研修② (事例研究・情報交換)の実施 [教職員]

【通年】

- ・足寄町福祉課派遣によるスクールカウンセラーの活用・連携 (月2回実施)

4 取組の内容

1 全校教育相談（年2回）の実施

ア ねらい 生徒の悩み、抱えている問題等の整理や解決の糸口を見出すため、全教職員により教育カウンセリングを行い、生徒の豊かな心の成長・発達を促すことをねらいとする。

イ 対象 全校生徒

ウ 内容 生徒指導部の教育相談担当教員が、事前アンケートをもとに全教職員を割り振り、全校生徒の面談を行う。実施後、全教職員で情報を共有する事例や個別に対応する事例等、教育相談担当教員が結果を取りまとめ、後日、教職員全体で「教育相談に関わる校内研修」を実施し、事例研究や情報交換を行う。

エ 成果 教員からの働き掛けもあり、小・中学校から続いている人間関係の悩みなどを話してくれる生徒が増加しており、いじめの早期発見・未然防止につながっている。



2 高齢者等複合施設訪問の実施

ア ねらい 高齢者や障がいのある方等の尊厳やさまざまな人々が共に支え合って生きることの重要性を認識し、家庭や地域及び社会の一員として主体的に行動することの意義について考える。

イ 対象 2学年全生徒（平成28年度は40名参加）

ウ 内容 足寄町の高齢者等複合施設「むすびれっじ」を訪問し、グループごとに入所者と散歩、トランプ、オセロ、ホットケーキづくり、ぬりえ、折り紙などを通して高齢者や障がいのある方々との交流を行う。

エ 生徒の感想 今回の実習を通して自分の中の見聞が更に広まりました。これからは色々な視点で今の高齢社会を見る必要があると強く思いました。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移（平成29年1月末現在）

中途退学者は昨年度1名（高齢者）、今年度は0名。不登校者数は2名と変わらないが、欠席日数は大幅に減少している。[欠席総日数（全学年）は昨年度764日⇒今年度430日]

イ その他の指標による評価

保健室利用者数は各学年とも大幅に減少している。[今年度1学年は39名、現2学年は昨年度157名⇒今年度112名、現3学年：昨年度72名⇒今年度24名]

ボランティア活動参加者数も大幅に増えている。[昨年度204名⇒今年度248名]

ウ 「Hyper-QU」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

ソーシャルスキルについて、全国平均を大きく上回り、望ましい方向に変化した生徒が増加している。

エ 生徒の変容した姿

援助希求しやすい雰囲気が醸成され、教育相談等において悩み等を話してくれる生徒が増加している。（今年度後半からは、小・中学校からの人間関係を相談する生徒が増加している。）

2 課題

年度途中の指定であったため、新たに外部と連携する取組等を企画した際に難しい場面が多かったため、次年度に向けて早い段階からの調整が必要である。

3 次年度に向けて

「Hyper-QU」に関する校内研修会終了後、本取組についての共通理解が深まった。次年度は引き続き全校教育相談や個人面談等の一層の充実を図るとともに、外部の関係機関との連携を深め、生徒が様々な体験ができる機会の拡充していく。

北海道釧路明輝高等学校

課程： 全日制
 学科： 総合学科
 生徒数： 592名

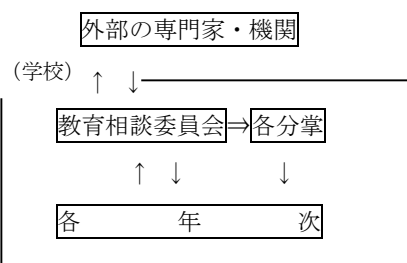
1 取組の特徴

生徒自身が自己理解及び他者理解を深めるとともに、コミュニケーション能力の向上を図るため、構成的グループエンカウンター (SGE) や集団カウンセリングなど、様々なエクササイズを実施する。さらに、個別面談を重視し、年間に各年次複数回実施するとともに、スクールカウンセラーによる個別カウンセリングの充実を図る。その際、「Q-U」や「ほっと」などを活用し、予防的な見地に立って生徒の小さな変化にも目を向けていく。また、生徒間はもとより、生徒と教師との良好な人間関係を構築するとともに、学校やクラスに対する帰属意識を高めるため、教員の教育相談に関わるスキルアップを図ることをねらいとした研修会を実施する。

2 取組のねらい

一人一人の生徒を大切にす積極的な生徒指導を推進し、生徒の人間関係づくりのスキルアップや教職員の教育相談に関する指導力の向上を図ることで、全ての生徒の学校生活に対する満足度を高め、不登校やいじめの未然防止を図る。

<組織図>



3 取組の経過

4月～5月

- ・入学前の中学校訪問による生徒情報の収集
- ・宿泊研修におけるリレーションシップトレーニング(1年次)
- ・集団カウンセリング(2年次)
- ・個別面談による生徒の現状や家庭環境の把握及び学校生活における不安や悩み等の聞き取り(全年次)
- ・生徒情報の共有(教員間)
- ・特別支援学校への訪問及び交流学习の実施
- ・Q-Uの実施(全年次)
- ・Q-Uの結果に基づく個人面談(全年次)

7月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・個人面談による学校祭前後における友人関係の変化や不安、悩み等の聞き取り(全年次)
- ・子ども理解支援ツール「ほっと」の実施

8～9月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

10月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

11月

- ・特別支援学校への訪問及び交流学习の実施
- ・Q-Uの実施(1・2年次)
- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・Q-Uの結果に基づく個人面談(1・2年次)
- ・スクールカウンセラーによる校内研修会

12月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)

1月～3月

- ・個別カウンセリング(スクールカウンセラー)
- ・集団カウンセリング(1年次)
- ・今年度の事業評価

4 取組の内容

1 個別カウンセリング（スクールカウンセラー 塚本 久仁佳氏・宮尾 賢子氏）

- (1) 日 時 平成 28 年 5 月 11 日（水）～現在
- (2) ねらい 生徒や保護者の不安や悩み等を解消し、満足度の高い生活を送ることができるよう支援する。
- (3) 対 象 希望生徒又は保護者
- (4) 内 容
 - ア 生徒又は保護者へのカウンセリング及び助言
 - イ 生徒又は保護者へのカウンセリングの結果に関わる教員への助言
- (5) 成 果 カウンセラーの助言により、生徒理解を深めるとともに、生徒個々に対する教員のカウンセリングのスキルアップを図ることができた。
- (6) 課 題 日常的な生徒との関わり、「ほっと」や「Q-U」などの結果をもとにカウンセリング対象生徒を決めているが、対象生徒をより効果的なタイミングでカウンセリングにつなげられるよう、教員間で情報の共有をより密に図る必要がある。

2 集団カウンセリング（外部講師 三島利紀氏）

- (1) 日 時 ①平成 28 年 4 月 19 日（火）②平成 29 年 2 月 15 日（水）
- (2) ねらい 生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成を図るため年次ごとに集団カウンセリングを実施し、人間関係づくりを支援する。
- (3) 対 象 ①2 年次生徒 ②1 年次生徒
- (4) 内 容 各年次の生徒に対する集団カウンセリング
- (5) 成 果 生徒は集団カウンセリングの実践を通して自己理解を深め、他者理解に必要となるコミュニケーションの大切さを理解することができた。
- (6) 課 題 日常的に人間関係づくりを支援する必要があることから、継続した取組とする必要がある。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者及び転出者は毎年数人ずついるが、少ない人数で推移している。該当生徒についても、ホームルーム担任及び養護教諭等が相談を受けるなかで、生徒の思いを汲み取ることができ、早期から学校の支援体制の中で指導を行うことができています。

5 次年度に向けて

イ その他の指標による評価

スクールカウンセラーがほぼ毎月来校し、生徒との個別カウンセリングを実施するとともに、各年次における個別面談の充実により、保健室へ外科・内科的要因を除き相談を目的として来室する生徒は、例年より少ない人数となっている。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

全体の「要素偏差値」は50.0以上あり、大きな変動もなく安定した数値であることから、集団として落ちついている本校生徒の実態を表しているといえる。「礼儀」「遵守」「自律」の数値が高く、「拒否」「緊張」「忠告」の値が低いことから、安定した集団を維持することはできるものの、自分の意見を主張したり相手を批判したりするなどの、正面からぶつかり合うような人間関係を築くまでには至っていないと考えられる。SNSによる人間関係づくりの影響もあろうが、自己効力感を高め、卒業後の進路に耐えうる力を身に付けるためにも、もう一步進んだ人間関係の構築が求められる。

エ 生徒の変容した姿

スクールカウンセラーによるカウンセリングを経た生徒が「今まで自分が悩んでいたことは悩まなくてもいいことだ」と自分を変えるきっかけを見付け、それ以後教室で友人とコミュニケーションをとる際に、大変楽な気持ちで接することができるようになっていた。ホームルーム担任等との面談は重ねていても、学校以外の異なる立場の人から異なる言い方でアドバイスをもらうと自己理解・自己変容につながるきっかけになることを改めて認識することができた。

他にカウンセリングを受けた生徒も、その後の面談等で確認をしたところ「気持ちが前向きになるきっかけをもらった」と口にすることが多くあった。教員以外の方に話を聞いてもらうという形は、生徒にとって楽な気持ちで話をするため、教員には見えない問題を表出させ、その悩みを共有するきっかけとなることができるという意味で大変意義がある。

2 課題

生徒が悩んでいても気付かないケースやスクールカウンセラーによるカウンセリングにつながらないケースがまだ見受けられるので、生徒の「小さなサイン」を見逃さない教職員の一層の意識改革が求められる。また、スクールカウンセラーの役割についても定期的に知らせ、気軽に相談できるような体制作りが必要である。

3 次年度に向けて

- (1) 今年度は、スクールカウンセラーによるカウンセリングを効果的に行うことができ、生徒の悩みに対応することができた。ただし、生徒の悩みそのものが大きく減ることは考えられないので、スクールカウンセラーに頼らない教育相談を組織的に行う。
- (2) 「Q-U」については生徒の状態把握などに活用することができたが、「ほっと」についてより一層効果的な活用を図る。
- (3) 本事業における取組と本校の教育活動の中核を占めるキャリア教育に係る取組や、生徒指導及び特別支援教育に関する学校経営方針との融合を図り、本事業の終了後も継続的に積極的な生徒指導を推進するよう工夫する。

北海道厚岸翔洋高等学校

課程： 全日制
 学科： 普通科・海洋資源科
 生徒数： 149名

1 取組の特徴

- (1) スクールカウンセラーやPTと連携した個別の生徒への困り感への対応
- (2) 外部講師を活用した校内研修による、教員の相談活動に対する理解促進
- (3) 「Hyper-QU」の活用によるきめ細かな生徒理解と生徒指導

これらの取組を通して教育相談の充実を図り、生徒の心身の健康の保持増進に努め、自殺の未然防止を図る。

2 取組のねらい

本校の生徒は特別な支援を要する生徒、家庭事情などで情緒が安定しない生徒など様々な方面で支援を必要とする生徒が多く在籍する。また、教育相談等で「死にたい、消えてしまいたい」といった言葉も聞く。

こうした課題を踏まえ、スクールカウンセラーの生徒の自殺予防を含めたカウンセリング・面談、授業参観、教員への助言を受けることで生徒の心身の健康の保持増進を目指す。また、教員が生徒のクラスでの立ち位置や状況を把握するため、「Hyper-QU」を実施し、さらに「Hyper-QU」の活用の充実を目的とした校内研修を行い、学級経営や授業の充実に努める。

3 取組の経過

4月

- ・入学前の中学校訪問による生徒の情報収集と全職員による生徒の情報交換・共有
- ・1学年を対象としたアンケート実施
(サポート対象の見極め)
- ・宿泊研修時における仲間づくり支援
(1学年)

5月

- ・学校満足度アンケートの実施
- ・第1回 教育相談週間
(生徒が面談したい教員を自由に指名できる)

7月

- ・「Hyper-QU」の実施(1回目)
- ・外部講師による生徒理解のための研修
(「Hyper-QU」の実施)
- ・PTによる対象生徒の授業観察・面談・カンファレンス
- ・第2回 教育相談週間
(生徒が面談したい教員を自由に指名できる)

7月

- ・生活習慣アンケートの実施
- ・SCによる対象生徒の面談とカンファレンス

11月

- ・SCによる対象生徒の授業観察、面談及びカンファレンス

1月

- ・特別な支援を要する生徒の入学者選抜時に必要な配慮についての校内研修
(講師：対象生徒の中学校の担任)
- ・SCによる対象生徒の面談とカンファレンス

2月

- ・第3回 教育相談週間
(生徒が面談したい教員を自由に指名できる)
- ・PTによる対象生徒の授業観察、面談及びカンファレンス
- ・SCによる対象生徒の授業観察、面談及びカンファレンス

4 取組の内容

1 外部講師による校内研修（「Hyper-QU」の活用による生徒理解について）

- (1) 日時 平成 28 年 7 月 26 日（火）
- (2) 対象 全教職員
- (3) ねらい 「Hyper-QU」を効果的に活用し、生徒理解を深め、学級経営や生徒指導、授業に生かす
- (4) 内容 「Hyper-QU」の分布の見方、学級経営や教科指導への活用方法、教育相談の進め方
- (5) 成果 実際に昨年度の「Hyper-QU」の本校の結果を使用して具体的に説明を受けた。また、生徒のクラスでの立ち位置、教育相談の進め方など未活用になりがちな「Hyper-QU」の効果的な活用方法を学ぶことができ、教員の生徒理解が深まった。その結果、「Hyper-QU」を活用した教育相談が進めやすくなった。



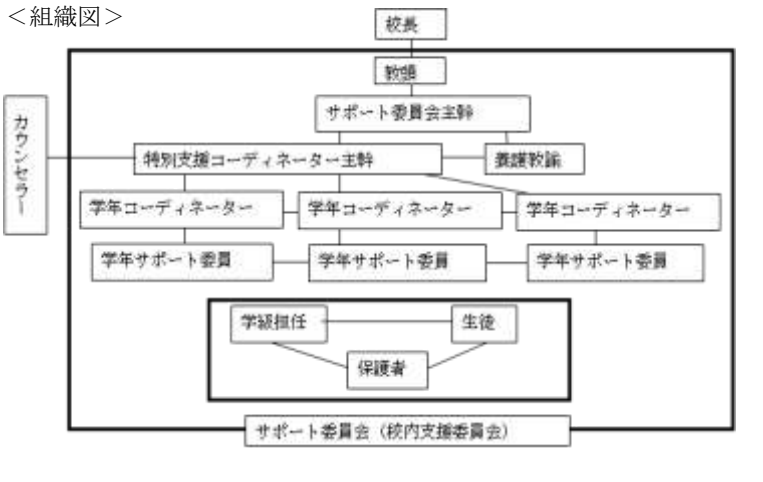
2 スクールカウンセラーによる生徒への個別のカウンセリング及び教員とのカンファレンス

- (1) 日時 随時
- (2) 対象 全生徒
- (3) 内容 カウンセリングを希望する生徒、気になる生徒を対象に個別カウンセリングを実施した。（継続カウンセリングの生徒も含む）
- (4) 成果 カウンセリングを受けた生徒の感想から、スクールカウンセラーに話をじっくり聴いてもらうことで、生徒の自己理解が深まった様子が見られた。また、事後のカンファレンスを通して生徒理解を深めるとともに指導方法について助言をもらい、自己を深く見直すことができた。

3 宿泊研修における集団カウンセリング（グループエンカウンター）

- (1) 日時 平成 28 年 4 月 20 日（水）
- (2) 対象 1 学年
- (3) ねらい グループエンカウンターを通して、生徒の相互理解と仲間づくり、学年としての良好な人間関係の構築を図る。
- (4) 内容 ネイパル厚岸のスタッフによる集団カウンセリング（グループエンカウンター）
- (5) 成果 生徒同士のクラスや学年への帰属意識が高まり、その後に続いたスポーツレクではクラスの団結力の強さが見えた。生徒の相互理解や集団づくりに効果があった。

<組織図>



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・【中途退学者】平成26年→5名 平成27年→6名 平成28年→5名
- ・【不登校】平成26年→0名 平成27年→1名 平成28年→0名
- ・依然として中途退学者及び不登校生徒が一定数いる

イ その他の指標による評価

- ・【保健室の相談者】平成26年→170名 平成27年→190名 平成28年→114名
- ・【停学指導】平成26年→5件5名 平成27年→6件8名 平成28年→1件1名
- ・保健室へ相談に来る生徒数、特別指導を受ける生徒数が減少傾向となっている。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況（本校はHyper-QU）

「Hyper-QU」の実施により、学級全体の生徒の様子を担当がより把握しやすくなった。よりよく「Hyper-QU」を活用するために校内研修を行った効果もあり、要支援群の生徒を中心に面談を行ったり、不満足群にいる生徒へ役割を与え自尊心を高めたりするよう支援を行った。まだコミュニケーションの力が弱く、相手とうまくやりとりできない生徒はいるが、生徒会活動が生徒中心に活発に行われるようになり、学校祭も生徒主体の活動が増加した。

エ 生徒の変容した姿

- ・コミュニケーションスキルが低い生徒はまだおり、人間関係を上手に築けない生徒が一定数いる。また、自尊感情が低く、自分に自信のない生徒が多く在籍する。
- ・ボランティア部員が増加し、積極的にボランティアに努める生徒が増えた。また、学習が遅れている生徒に対してクラスメイトが勉強を教え合うなど支え合う姿を見ることが増えた。
- ・SCやPTの助言により、生徒自身が自己理解を深め生徒自身が積極的に行動する姿を見ることができた。

オ 教員について

- ・教職員間の情報共有を深めることで一貫した生徒指導を充実させることができた。
- ・「Hyper-QU」の活用を行い、充実した教育相談を継続することができた。
- ・SCやPTの助言により、生徒理解を深め、充実した教育相談を行うことができた。
- ・SCやPTの助言により、困り感の強い生徒の対応を工夫することができた。

2 課題

- ・人間関係のトラブルや就学意志を失ってしまい進路変更となる生徒が一定数いる。
- ・コミュニケーションスキルが低い生徒はまだおり、人間関係を上手に築けない生徒が一定数いる。また、自尊感情が低く、自分に自信のない生徒が多く在籍する。

3 次年度に向けて

- ・校内研修をさらに充実させ、生徒理解、生徒指導をより深める。
- ・生徒理解の深まりと共有化をめざし、校内研修をさらに充実させる。
- ・教職員間の情報共有を深めることで一貫した生徒指導を充実させる。
- ・充実した教育相談を継続し、生徒自身が自己理解を深め、生徒自身の自己肯定感を高める面談を行えるように努める。

北海道標茶高等学校

課程： 全日制
 学科： 総合学科
 生徒数： 211名

1 取組の特徴

昨年度から引き続き本事業を通じ、コミュニケーション能力を高めるとことにより、集団生活において問題を解決する力や、良好な人間関係を構築する力を身に付ける。

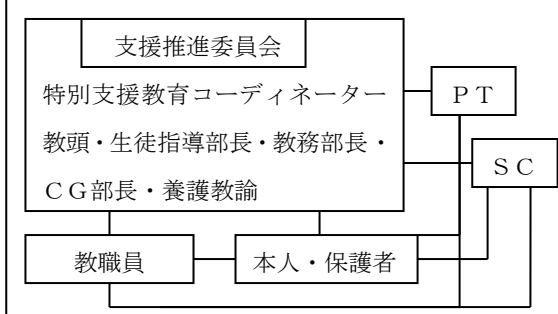
- ・ピア・サポート活動による、生徒のコミュニケーションスキルや自己肯定感の向上と良好な人間関係の構築。
- ・「ほっと」を活用した中学校との連携と教育相談週間を通じた、より深い生徒理解と生徒対応。
- ・スクールカウンセラーを活用したコミュニケーション能力の育成を図る取組。

2 取組のねらい

本校は、生活面や学習面で問題を抱えたまま入学してくる生徒が多く、入学後学校に適応できず、不登校や別室登校を余儀なくされる場合がある。

こうした課題を踏まえ、本事業を活用し、スクールカウンセラーの援助や指導を受け、自己肯定感を高める取組を行い、コミュニケーションスキルの向上を図る。

<組織図>



3 取組の経過

- 4月・外部講師による生徒理解のための校内研修（「ほっと」の有効活用について）
- ・入学前の中学校訪問による生徒情報収集と全職員による生徒の情報交換・共有
- ・宿泊研修における仲間づくり支援(1学年)
- 5月・「ほっと」の実施（全学年）
- ・教育相談週間（全学年）
- ・個別カウンセリング（SC）

- 8月・「ほっと」の実施（全学年）
- ・教育相談週間（全学年）
- 9月・個別カウンセリング（SC）
- 3月・「ほっと」の実施（全学年）
- ・個別カウンセリング（SC）
- ・教育相談週間（全学年）
- 9月～3月
- ・ピア・サポートトレーニング（全8回）

4 取組の内容

1 生徒理解に向けた取組（「ほっと」の実施）

- ア ねらい** ・「ほっと」の結果をもとに生徒理解を深めるとともに、生徒の面談を通し早期の実態把握を行う。また、専門家であるSCを交えて、学級集団や個々の生徒へのアプローチ方法を検討する。
- ・生徒の不安や悩み、困り感を解消し、安心して学校生活を送れるよう支援する。

イ 対象 全学年

- ウ 内容** ・外部講師（標茶町立標茶中学校長 松岡伸之氏）を招聘し、子ども理解支援ツール「ほっと」の見方と分析、有効活用についての研修を実施。
- ・中学校からの「ほっと」と生徒情報についての引継ぎを実施
 - ・年3回の「ほっと」の実施（4月・8月・3月）
 - ・「ほっと」の結果を活用した教育相談の実施
 - ・「ほっと」の結果や教育相談から必要と思われる生徒や困り感をもつ生徒を対象にしたスクールカウンセラーによる個別カウンセリング

4 取組の内容

エ 成果 ・全教員が「ほっと」について理解を深めたことで、生徒のコミュニケーション能力向上を図る有効活用の手立てを知ることができた。また、中学校からの引継ぎや中学校での取組を知ることで、高校入学後の生徒への関わりや対応が明確化された。また、生徒の背景や現状、コミュニケーションの傾向や課題等を把握し、それをもとに面談を進めることができた。

2 ピア・サポート活動

ア ねらい ・様々な支援スキル演習を通して、思いやりのある行動が実行できるような雰囲気を作りだし、豊かな人間関係を構築できるようにする。

イ 対象 ・1学年及び2、3学年の希望生徒

ウ 内容 ・SCの宮尾賢子氏の協力のもと、放課後、ピア・サポートトレーニングを実施。
・放課後トレーニングを受けたピアサポーター達による、1学年全員を対象にしたピア・サポート学習を実施

エ 成果 ・ピアサポーター17名が、1年生全員を対象にしたピア・サポート学習の企画から進行までを行った。学年全体が更に打ち解けた雰囲気を作り出し、生徒集団における感情表現の抵抗感を緩和することで、円滑な人間関係の構築を図ることができた。生徒からは、「いろんな人とコミュニケーションがとれる良い機会になりました」「みんな感じていることが違うことを改めて感じ、その上で、みんなと仲良くできたので楽しかったです」等の感想が多く見られた。



5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

- ・中途退学者：平成27年度 2名 → 平成28年度 7名
- ・不登校生徒数：平成27年度 0名 → 平成28年度 3名

イ その他の指標による評価

保健室利用統計より保健室を利用する生徒が減少した。なかでも相談件数が減り、これはピア・サポート活動の成果による、仲間同士の支援活動が上昇したためと捉えている。

ウ 「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

13要素のうち「礼儀」「遵守」の項目がほかの項目と比較し高く、「表明」「緊張」「拒否」の項目が低い。経時比較していくと、全体を通してどの要素も向上している。集団の中で自分の意見を言うことが苦手な生徒も、ピア・サポート活動やグループワーク、プレゼンテーションを通して友達と意見交換したり発表したりすることに慣れてきた様子が見られるようになった。様々な活動や人との関わりを通して徐々にではあるが、社会的コミュニケーションスキルが身に付いていることがうかがえる。

エ 生徒の変容した姿

ピア・サポートトレーニング実施によって、生徒の良好な人間関係の構築を図ることができた。地域連携や異校種と連携した行事やボランティア活動において、身に付けたコミュニケーションスキルを生かし、他者と積極的に関わる生徒が見られるようになった。

2 課題

各教職員が各場面で様々な取組をしているので、それを全体構造図としてまとめ、見えるようにする必要がある。

3 次年度に向けて

- ・活動の全体図を作成する。
- ・SCの支援による効果は大きく、本事業が決定した際には早い段階でSC人材を確保し、問題の未然防止や早期対応の観点から積極的に活用したい。

北海道白糠高等学校

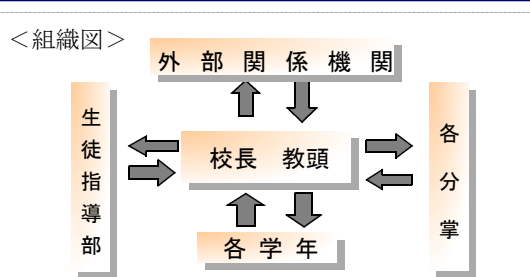
課程： 全日制
 学科： 普通科
 生徒数： 107名

1 取組の特徴

外部機関やスクールカウンセラー等と連携し、コミュニケーション能力を高めるための取組を行い、地域の協力のもと培ったコミュニケーションスキルを活用する学習を積極的に行う。

2 取組のねらい

本校には学習面や生活面で課題を抱える生徒が入学し、種々の事情から第1学年の途中で進路を変更するケースが少なからずある。こうした課題を踏まえ、本事業を通してコミュニケーション能力や自己表現力の育成を目指し、学習内容を工夫し、また、個別面談等を継続して行うことで、充実した高校生活を送らせたい。



3 取組の経過

- | | | | |
|----|------------------------------|-------|---|
| 4月 | ・ 中学校訪問による生徒情報の共有 | 10月 | ・ 地域町内会との合同避難訓練 |
| 5月 | ・ 第1回「Q-U」の実施 | | ・ SCによるピアサポートの授業(1学年) |
| 6月 | ・ 「Q-U」について校内研修会 | 12月 | ・ 地域住民と合同のそば打ち交流 |
| | ・ 「Q-U」を活用した個別面談 | | ・ 体育祭を通してコミュニケーション能力を向上させる取組の実施 |
| | ・ SCによるピアサポートの授業(1学年) | | ・ デートDV防止の出前講座(1学年) |
| | ・ 赤ちゃん交流(2回)(2学年) | 1月 | ・ 宿泊研修における集団カウンセリング(1学年) |
| | ・ 花壇栽植(地域住民と生徒会) | 2月 | ・ 「ほっと」の実施(1学年) |
| | ・ 交通安全街頭啓発(生徒会) | | ・ 第2回「Q-U」の実施(1学年、2学年) |
| 7月 | ・ 学校祭を通してコミュニケーション能力を向上させる取組 | | |
| 8月 | ・ 「ほっと」の実施(2学年) | 5月～3月 | ・ スクールカウンセラー(SC)による個別のカウンセリング及び教員とのカンファレンスの実施 |
| | ・ 幼稚園との交流(2学年) | | |
| | ・ 白糠養護学校との交流(3学年) | | |
| | ・ 幼稚園児との交流(2回)(2学年) | | |

4 取組の内容

1 スクールカウンセラー(SC)による授業「ピア・サポートについて学ぼう！」 (講師：公立学校スクールカウンセラー 佐々木 啓子 氏)

- (1) 対象 第1学年(6月と10月の2回実施)
- (2) ねらい ピア・サポートを通して自分自身を見つめ直すとともによりよい人間関係づくりについて学ぶ。
- (3) 内容 「カタルタ」や「お絵かきしりとり」などを活用したコミュニケーションゲームやグループ学習。
- (4) 成果 授業後のアンケートでは「ちょっとしたことでも言葉にしないと伝わらないことを改めて感じた」「グループでの学習が楽しかった」等の感想が寄せられた。10月に実施した2回目では、積極的に参加する生徒が増加した。



2 スクールカウンセラーによる生徒への個別のカウンセリング&教員とのカンファレンス (北海道教育大学大学院教授 臨床心理士 安川 禎亮 氏)

- (1) 対象 全学年
- (2) ねらい 生徒が自己の抱える問題を明確にし、自己理解を深め、自己肯定感を高める。
- (3) 内容 月2回程度、カウンセリングを希望する生徒(継続カウンセリングの生徒も含む)を対象に、個別のカウンセリングを教育相談室で実施した。
- (4) 成果 カウンセリングを受けた生徒の感想から、スクールカウンセラーに話をじっくり聴いてもらうことで、自己に対する理解が深まっていったことが分かる。また、事後のカンファレンスを通して、教員一人一人が、生徒理解を深めるとともに、自分自身の指導方法含めて自己を深く見つめ直すこともできた。

3 「Q-U」を活用した学級経営と生徒理解についての研修会の開催 (講師：釧路工業高等専門学校教授 三島 利紀 氏)

- (1) 対象 全教職員
- (2) ねらい 「Q-U」を活用した学級経営と生徒理解、面談の進め方について学ぶ。
- (3) 内容 「Q-U」についての講演(効果的な活用方法等)。
- (4) 成果 5月に実施した「Q-U」を活用し、6月に全校で個別面談を実施することができた。

4 宿泊研修における集団カウンセリング (グループエンカウンター)の実施

- (1) 対象 第1学年
- (2) ねらい グループエンカウンターを通して、生徒の相互理解と仲間づくり、及び学年としての良質な人間関係の構築を図る。
- (3) 内容 ネイパルあしよりのスタッフによる集団カウンセリングの実施。
- (4) 成果 生徒の感想から、ホームルームや学年への帰属意識が高まり、生徒の相互理解や集団づくりに効果があったことが分かった。



5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 第1学年において、中途退学者数が減少している。
平成26年度：10名→平成27年度：12名→平成28年度：1名
- (2) その他の指標による評価(自主的にボランティア活動に参加する生徒の増加)
平成26年度：75名→平成27年度：79名→平成28年度：103名
- (3) 第1学年は、5月と2月にQ-Uを実施し、面談等に活用することにより、生徒と教員との信頼関係を深く築くことができた。2月に実施した「ほっと」では、全ての項目で全道平均を上回っていた。
第1学年が5月に実施したQ-Uの結果は、学級満足群56.9%、非承認群25%、侵害行為認知群9.4%、要支援群18.7%だった。Q-Uの結果を分析し、担任、養護教諭及びスクールカウンセラーによる面談や学年団による声かけを継続して行った。また、コミュニケーションスキルを高めるために、スクールカウンセラーによる「ピア・サポート」の授業を前期と後期にそれぞれ1回ずつ実施した。2月に行った第2回目のQ-Uでは、要支援群の生徒が3%となり、学級に居場所があり、認められていると感じている生徒の割合が増加した。
- (4) 生徒の変容した姿
本校には、自己表現や人との関わりを不得手に感じている生徒が多くいるが、ステップアップ・プログラムの取組を通して自己を表現しつつ、周りとうまく関わる力が身に付いてきた。
第1学年では自己肯定感を高め、コミュニケーション能力を培うことを目的に学習や面談等を繰り返し実施した。第2・3学年では、地域行事への参加や幼稚園、養護学校、赤ちゃんと交流などの教科学習、町内会の方々と一緒の花壇作業や避難訓練等の行事を通して身に付けたコミュニケーションスキルを生かし、積極的に人と関わろうとする生徒が増加した。

2 課題および次年度へ向けて

- (1) スクールカウンセラーの支援による効果は非常に大きいことから、次年度以降も早期段階から積極的にスクールカウンセラーを活用する。
- (2) 「Q-U」及び「ほっと」を効果的に活用するための研修会を継続して行う必要がある。

北海道根室高等学校

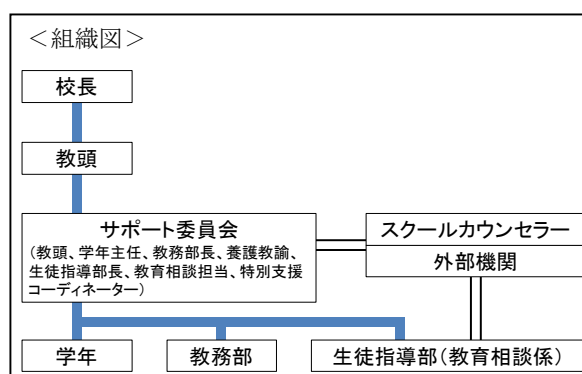
課程： 全日制
 学科： 普通科・商業科・事務情報科
 生徒数： 518名

1 取組の特徴

- (1) 2回の面談週間を設定し、Q-Uや「ほっと」の結果を踏まえて、全教員で教育相談を行う。
- (2) スクールカウンセラー（SC）を活用し、生徒一人一人への支援体制を強化する。
- (3) 専門家や北海道保健福祉部福祉課、根室保健所の協力を得て、自殺予防教育を行う。
- (4) 外部の専門家を講師に招き、生徒指導に関連する教職員校内研修を実施する。

2 取組のねらい

- (1) SCや外部機関との連携を深めることにより、専門的で継続的な教育相談体制を確立する。
- (2) 生徒が気軽に教育相談に向かえる意識付けとしての講演と、教職員の意識及びスキルの向上を目的とした校内研修を実施する。
- (3) 総合的な学習の時間を活用し、生徒のソーシャルスキル等の向上を図るとともに、互いに認め合える人間関係づくりを構築できるような体系的な取組を推進する。



3 取組の経過

4月	・人間関係づくりワークショップ(1学年)	10月	・講演「カウンセリング」(全学年)
5月	・総合的な学習「コミュニケーションと傾聴について」(1学年)		・校内研修「自殺予防教育」
	・Hyper-QU 1回目(全学年)		・校内研修「特別支援」
	・保健指導「アサーション」(1・2学年)	10～3月	・自殺予防授業「いのちの授業」(全学年)
7月	・面談週間(全学年)	11月	・講演・ワーク「ストレスマネジメント」(全学年)
9月	・校内研修「ほっと」		・校内研修「特別支援について」
	・校内研修「エピペン」	11～3月	・SC個別カウンセリング(希望生徒)
	・校内研修「性的マイノリティ」	2月	・校内研修「ストレスマネジメント」
	・自殺予防週間(全学年)	3月	・面談週間(1・2学年)
10月	・「ほっと」、Hyper-QU 2回目(1・2学年)		

4 取組の内容

1 「ほっと」及びHyper-QUによるアセスメント

- ア ねらい** 学級集団のコミュニケーションスキルを踏まえて指導計画を立てるとともに、個人の悩みや困り感を理解することで学校生活における指導や支援に生かす。
- イ 対象** 全学年
- ウ 内容** 年2回実施(2回目は1・2学年のみ)。活用方法について校内研修を行った。
- エ 成果** 学校生活の不満や悩みを把握し、直後の面談週間で役立てることができた。

4 取組の内容

2 コミュニケーションスキルトレーニング（4～7月）

ア ねらい 人間関係を構築するきっかけをつくり、他者を理解し、互いを尊重したコミュニケーションスキルを身に付ける。

イ 対象 1学年（保健指導は1・2学年で実施）

ウ 内容 4月の宿泊研修ではネパール厚岸より講師を招き「人間関係づくり」を中心としたアイスブレイクやグループワークを実施した。

5月の総合的な学習の時間において、バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーションの関係や傾聴の重要性についてワークを交えて実施した。

7月には根室保健所の協力で1・2学年を対象に保健指導を行い、アサーションについての講義とグループワークを実施した。



宿泊研修でのグループワーク

エ 成果 宿泊研修のグループワークでは、他者の意見を尊重しながら課題解決に向けて関わり合う姿が見られ、他のプログラムにおいても仲間意識の高揚につながった。5月、7月に実施した講義やトレーニング後には、多くの生徒から「他人の話の聴き方、反応の仕方」や「他者を尊重した自分の意見の伝え方」が大切だと実感したという言葉が聞かれた。また、総合的な学習の時間に実施したバーバルコミュニケーションのトレーニングにおいては、限定された場合の意思伝達の難しさや、ネットやSNSなど活字を用いたコミュニケーションにおけるトラブル防止についても理解を深めることができた。

3 自殺予防教育

ア ねらい 様々な心の健康問題について早期に気付くとともに、ストレスマネジメント能力を育てる。また、相互に援助を希求したり、それを適切に受け止めたりする方法を身に付け、自殺を未然に防ぐための体制を構築する。

イ 対象 全学年

ウ 内容 四天王寺学園スクールカウンセラーで、自殺予防教育の第一人者である阪中順子先生を講師として招き、自殺予防教育の授業を実施した。授業は「心の健康問題の早期認識」「ストレスマネジメント」「援助希求的態度の育成」の3つの要素を柱として展開された。



自殺予防教育「いのちの授業」

エ 成果 援助希求をどのように誰にすればよいのか、具体的に学ぶことができた。また、困っている友人への対応の仕方については、ロールプレイを通して、体験的に学ぶことができた。事後アンケートからは、授業で学んだ、合言葉の「き・よ・う・し・つ」（気付いて、寄り添い、受け止めて、信頼できる大人に、つなげよう）が生徒に浸透していることが確認できた。

4 取組の内容

(4) スクールカウンセラー（SC）との連携

ア ねらい SCと連携して教育相談体制の充実を図り、一人一人の支援に役立てる。

イ 対象 全学年

ウ 内容 北海道教育大学釧路校の安川教授及び小淵准教授を講師に招き、カウンセリングやストレスマネジメントについての講演を実施した。講演後、生徒に個別カウンセリングの希望を確認するアンケートを実施し、11月より個別カウンセリングを継続している。



講演「カウンセリングについて」

エ 成果 本校の課題であった教育相談体制の充実という点で大きな成果があったと考えられる。これまでは、生徒相談室の利用が少なく、悩みなどを抱えている生徒は保健室に集まる傾向があり、通信を発行して相談室の利用方法などを周知したが、変化は見られなかった。しかし、講演後には個別カウンセリングを希望する生徒が多く現れ、SCとの面談を継続的に実施し、情報共有等の連携ができていく。また、SCだけではなく、本校教育相談担当への相談も増えており、講演を契機に、生徒のカウンセリングに対する抵抗感が解消されつつある。また、複数回実施した校内研修により、教員がチームとして生徒一人一人に向き合うための基礎的知識と共通認識もつことができた。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

中途退学者はH27が0人、H28が3人であった。不登校生徒数はH27が0人、H28が3人で人数はやや増加した。

イ その他の指標による評価

10月末時点で、SCカウンセリング希望者12名、本校教員との相談希望者10名。これまで利用者が少なかった生徒相談室における面談が継続的に行われるようになった。

ウ 「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

初めて「ほっと」を実施したため、経時の比較はできないが、どのクラスにおいても全項目で全道平均をわずかに上回る結果であった。しかしながら、教員評価と生徒評価において乖離も多く見られ、学級平均だけではなく、個人の結果をもとに、検証を続ける必要がある。

エ 生徒の変容した姿

教育相談への抵抗感が少なくなり、希望する生徒が増加した。また、各授業の後には、「コミュニケーションの大切さについて考えることができた」「今まで以上に人との関わりを意識して言動を選んでいきたい」という生徒の声が多く聞かれた。

2 課題

ア 生徒は、各取組において、意識的に行動できているが、成果を日頃の生活につなげ、維持できるような働きかけが必要である。

イ 各種アセスメントの活用についての研修を重ねるとともに、その結果や経時変化の分析を行い、指導や支援の方針を全体で共有する必要がある。

3 次年度に向けて

SCと連携した教育相談を継続するとともに、学年や教科担任と連携していける体制づくりや研修の充実を図る。